顧みて

熊　崎　久　子

35年前の早春、初めて駒澤大学の門をくぐりました。渋谷から「玉電」と呼ばれていた路面電車に乗り継ぎ、大学を訪れました。雪の降りしきる朝のことで耕雲館（現禅文化歴史博物館）横の坂道をゆっくり下って旧研究館へ向かったのが昨日のことのように思えます。

当時の短大英文科はまさに女大学の体で、専任の教員は女性三人のみでした。七号館一階の公園側最奥の一室に、竹内、山田の両先生と私、副手の戸田さんの四人が机を並べておりました。竹内先生のご指導よろしきを得てこのスタッフで学内の各種委員会の役割を何とか果たし、課外には私的な課外ゼミを設け、竹内先生はT. ハーデイ、山田先生はC. ブロンテ、私は詩を担当し、しかるべき数の学生の参加もあり、思えば、創成時の熱意に燃えていた時期でありました。要となられた竹内先生の存在は大きく、何事につけ先生の機敏な判断力、果断な決断力に負うところ大であったとの思いを今なお強くもっております。間もなく、岡本先生、滝先生と相次いで男性の先生方が着任され、知的でリベラルな本学科独自の歩みが始められたの感がいたします。

やがて学生運動の波が本学にも打ち寄せ、覆面とヘルメットで装った学生運動の騎手たちが学園にはびこり、暴力と喧噪の日々が訪れました。授業中の教場から椅子や机を運び出す者、怪我をして血を流す学生も出ました。また、学内に爆弾を仕掛けたという報に全学こぞって駒沢公園に避難するという事態も再三繰り返されました。教授会が連日のように開催され、その会議の場にまで学生たちが乱入してくるようなこともありました。当時、短大の教員は外国語、体育、一般教育、教職の教員の方々と共に文学部教授会に所属しておりましたので、この教授会はかなりの大所帯だったと記憶しております。文学部の丹羽小弥太先生、外国語の吾妻雄二郎先生が熱弁を奮っておられた姿が目に浮かび

ます。間もなく嵐は去りましたが、残された課題は少なくなかったと思います。

当時は短大英文科の教員も全学の語学教育に携わっており、この時期特に印象に残っておりますのは毎夏休みに実施された恒例の夏季補講です。暑い最中、共通テキストを使っての連日の補習授業は教員はもとより、学生、特に体育関係の学生には大変な負担であったと思います。律儀に出席をし、暑さと眠気との闘いに耐えて頑張っていた彼らの姿も懐かしく思い出されます。

一方、有志の方々のお骨折りによって、給与委員会が出来、これを母体にして教職員組み合いが発足し、研究の面においても、生活の面においても格段の改善がなされ、また懸案でありました学長公選制も実現の運びとなり、さらには18才人口の激増とも相俟って学生数も飛躍的に増加し、充実と発展の時期を迎え、今日に至っているといえましょう。

その中にあって短大英文科は個性溢れる先生方を擁し、教育その他において試行錯誤を繰り返しながらも常に先駆的な理念とその実施に向けて努力を重ねておりますことは周知の通りであります。特に思い出に残っておりますのは現学科主任のモエ先生を専任教員としてお迎えした時のことです。それまで本学には外国国籍の専任教員はおりませんでした。(トルネー先生という特別の方の例外はありましたが) なおも古い体質が多々残っていると見られております当局、また人事委員会での反応はいかがなものか、が非常に懸念されるところでした。当時学科主任の任にありました私は人事委員会出席に当たって大いに緊張いたしました。しかしこれは杞憂に終わりました。モエ先生は既に10年余りに亘って非常勤講師として勤めておられ、その実績、お人柄からも本学においては知名度、人気共に極めて高く、殆ど質問もなく採用が認められました。ところが、その後の短期大学教授会におきまして、他学科の某先生から、この件に関しどのような文章を当局に提出したのか読み上げて欲しいとの要望が出されました。それ程に関心のある事態だったのかとも思います。そのような経緯を経て本学最初の外国人専任教員が短大英文科において誕生をみたのです。忌憚のない意見の開示、自由な討論、そして実りある妥協、これらが英文科の基本的な在り方であり、確かな成果を上げている所以だと信じ、またそれを誇りにも思っています。

小説や芝居をこよなく愛しダンディな滝先生、博識で折り目正しい岡本先生、何度も何度も根気よくパソコンの使用法を教授して下さった梅原先生、いつも独特なジョークで座を和ませて下さるモエ先生、何事にも真摯な態度で取り組んでおられる高野先生、終始さりげなく支え、助けて下さった湯浅先生、留学

中のニューヨークから沢山の情報や研究資料を送って下さったギャリソン先生、万年青年の吉沢先生、穏やかで優しく、いつも前向きのアシュウエル先生。そして長年に亙り公私両面において力を貸して下さった事務の横山さん。

進取の気質に富んだ学科の気風と諸先生のご厚情を得て、私も心に老いを感じることもなく、学生指導の傍ら希みに任せた研究も何とか続けることが出来、幸せであったと痛感しております。思い出に溢れ、心の故郷でもある短大英文科に一日も早く新たなる道が拓け、飛躍の時が訪れますことを祈念しております。

思い出すこと

滝　　静　寿

最近、先生の後姿に何か変化が起っていると感じることがある。しばらくして、ああそうかと納得する。短大での教育・研究生活に終止符を打つ時が迫っているからかも知れない。長ければ長い程、想いは深い。人ごとではない。

私が赴任した時の事が昨日のことのように思い出される。私の短大教員としての運命は、英文科の三大美人教授に拝謁することから始った。その三女史とは、竹内先生、山田先生、熊崎先生である。共通点を上げると先ず若々しいこと、優美であり、知的であること等々、相異点は三人三様明確な個性の持主であることである。お雛様の三官女を思い浮べた。私は三段目（三枚目の方が正しい）の五人囃子の一人として舞をまう役目を演じなければならないと覚悟し、それ以来今日に至っている。しかし、山田先生、竹内先生が退任され、此の度は唯一の官女の勤めを全うし、段を降りることになった。二段目不在のもとで舞うことに改めて空しさを感ずる。

先生とは、シェイクスピアを中心にエリザベス朝の演劇の研究を共有しており、講義においても先生の『英米文学概論』（主として十九世紀、二十世紀）と私の『英文学史』（主として古英語時代から十九世紀前半まで）を連係して